

THE FIFTH
WORLD IV



ザ・フィフス・ワールド4

藤代鷹之 TAKAYUKI FUJISHIRO

プレザンス
Pleasance

???

エディットの心に宿る
謎の少女。明るく勝ち気。

カゴトリ
CAGED-BIRD

二つ名: チート姫

VRMMO「リアルオンライン」出身

戦いに明け暮れるプリンセス。
裾の破れたドレスをまとい、
巨大な戦斧を振り回す。

メアリ
MARY

二つ名: テーブルクロス

VRMMO「クロス」出身

「クロス」時代からのHAYATE
の好敵手。正義感が強い。

カンテラ
LAMP

二つ名: 火種

VRMMO「リアル・
オンライン」出身

かつて仮想世界で大混乱を
もたらした伝説の違反者プレイヤー。

エディット
EDITH

NPC

VRMMO世界における
HAYATEとALICEの娘。

アリス
ALICE

二つ名: 大々魔道師

VRMMO「ゲルタニア」出身

世界的アイドルにして最強の
魔道師。美しい容姿ながら
ほとんど感情を表に出さない。

エフォー
aaaa

二つ名: 勇者

VRMMO「ワールドワールド・
ワールド」出身

弱者を助け巨悪に立ち向かう
正義の戦士。「はい」と「いいえ」
しか話さない。

ハヤテ
HAYATE

二つ名: 虐殺鬼

VRMMO「クロス」出身

世界最凶最速のプレイヤー
キラー。狐の白面に漆黒の
忍装束をまとう二刀流の忍者。

MAIN CHARACTERS
主な登場人物

Prologue 誘拐

真冬の葬儀場。黒い喪服の人々が蠢うごめいているけれど、物音は遙か遠く、ぼんやりと虚うつろろに聞こえる。色褪いろあせた風景。現実感が掌から、ぼろぼろと零れていった。

B M I・B C (ブレイン・マシン・インターフェイス・バイオ・チップ) が普及して、四つの巨大な V R M M O 『Power Four』が社会のシステムを支えるようになってから久しく、現代の在り様は前世紀にフィクションとして描かれた世界に近づいたとも云われる。だが、誰かが死んだ時の弔とむらい方は、陳腐さを感じるぐらいに変わらない。

両親が、死んだ。

楠木くすのぎ 諷はその当時、ようやく中学生になったばかりだった。

弟と妹はまだまだ幼く、頼れる親類縁者もない。

ああ。これから、どうしようか――。

諷はそう思いながら、物憂げに視線を伏せていた。

正確には、これは父親の葬儀である。母親は既に亡くなって久しい。三人目の子供、楓かえでをどうか無事に産み落としたものの、彼女は自分の命まで守ることはできず、若くしてこの世を去ってし

まったのだ。残された父親は、たった一人で子供達を育てるため、色々なものを犠牲にしてこれまで頑張ってきた。

その背中を、諷は数年間じつと見つめてきた。

ほんの少しでも、父の胸中を理解できていたのは、三人の子供の内では諷だけだろう。妹の楓は赤ん坊だったし、弟の颯もまだ右も左もわからないような子供に過ぎなかったからだ。

父の死の前に、諷は柄にもなく、思考を停滞させてしまっていた。心臓に無数の刃が突き刺さっているようだ。諷は顔を上げられなかった。父の無念と、自分の無力さ。この世の理不尽を呪いかけた。

顔を伏せたまま何も云わない諷をどんな風に捉えたのか、大人達はこれでもかと同情を寄せて来た。悔やみの言葉と涙、嗚咽。無粋にあれこれと語りかけて来る者もいたけれど、諷はやはり何の返事もせず、ロボットのようにお辞儀を繰り返していた。

悲しいという気持ちならば、ちゃんとあった。

別に、そこまで人間を辞めていない。

その当時、諷は、既にVRMMO世界においてトッププレイヤーの一員だった。

記憶の底にある最も古い情景は、両親の親友であるNPC（ノン・プレイヤー・キャラクター）に遊んでもらっていた時のものだ。大人でも難しい高度なデータパズルを、幼い諷はおもちゃを散らかすように容易く解いていた。

「ソラちゃんは天才だね」

遊び相手のNPC、名前はAAA。BMI・BCの発達により、他の多くのNPCと同じく、トライアも現実世界の側で、諷達の面倒をよく見ていた。

やがて仮初の母となる彼女は、大いに笑い、そして祈るように言った。

「願わくは、その才が幸に繋がるように……」

両親は、実の子に宿った才能に若干戸惑っていた。もしかすると、VRMMOにおける良き指導者としてトリアアが存在がなければ、家族はより多くの不幸に見舞われていたかも知れない。とはいえそれでも、母も父も子供達にひたすら真摯な愛情を注いでくれたわけで、諷にとってはその一点だけでも大きな支えとなっていた。小学校の宿題で尊敬する人を問われた時にも、父母の名前を躊躇なく書くことができたぐらいだ。

だから、悲しくないはずはない。

焼かれて灰と帰し、煙となって空に昇っていく愛すべき人。

それをぼんやりと見送りながら、諷は視界に、仮想世界を多重に映していた。

そう。悲しくないはずはないけれど、今さら、いきなり生き方を変えることもできない。

だから諷は葬儀が粛々と進む間も、仮想世界にアクセスを続ける。マルチレベルダイブ。彼の地で戦い続けていた。

『業が深いね』

トライアからは、そんな風に怒られる。

『あら、そうでしょうか？』

『そうだよ。ロールプレイすら崩さない』

『大丈夫ですよ。現実では、ちゃんと悲しんでいますから』

諷を揶揄するトライアの方こそ、葬儀場に現れることすらしないのだから、むしろ非情ではないだろうか。諷がそれを指摘してやれば、『あいつとの別れはきつちり済ませてある。私はそもそも、神や仏といった類の前に、のこのこと姿を見せられる立場でもないからね』と、トライアは死神のような恰好のままに笑った。

葬儀の最中、二人はVRMMOのダンジョンを淡々と進んでいた。天空に浮かぶ朽ちた城。白雲が回廊の窓の外に見える。バルコニーに出れば、吸い込まれそうな青空が目の前一面に広がった。

そして、耳をつんざく咆哮。

雷を纏った巨大な怪鳥が襲い掛かってくる。

互いに合図を出すこともなく、迅速に迎撃態勢を整えた。前衛はトライアである。片手剣と盾というオーソドックスなスタイルで、彼女は基本に忠実な戦い方をする。諷が操るアバターも、的確に仕事をこなした。後衛として、見事な援護射撃。決して弱いボスモンスターではなかったが、実力者二人の見事な連携の前には大した脅威にもならなかった。

断末魔と共に、怪鳥は青空の下に落ちていく。

システム音声クエストの完了を告げた。

ほとんど無意識に、システムウィンドウをオープンして報酬を確認する。機械のように慣れた動きだ。宙に表示されるウィンドウの文字列の向こうには、青空に呑まれて消え去るボスモンスターがまだ見えていた。

現実の諷は、相変わらず、天に昇っていく煙を眺めている。

現実もVR（ヴァーチャル・リアリティ）も、脳が作り上げた電気信号が見せる世界である。現実世界は、目や耳という感覚器官が受け取った光や音を、脳が電気信号として処理することで形作られ、片や仮想世界は、BMI・BCが脳内に偽りの電気信号を流すことで生み出される。どちらの世界も、それを知覚する脳こそが土台となる点は変わらない。

VRMMOが最初に生み出された時、仮想世界に埋没するための手段としては、へマルチレベルダイブが採用されていた。すなわち、現実で普通に生活を送りながら、同時にVRMMO世界をプレイするやり方だ。

このマルチレベルダイブを単純に行った場合、慣れないプレイヤーは悪い魔法に掛かったような不思議な状態に陥ってしまう。現実世界と仮想世界、ふたつの世界が重なるからだ。

生身が五感を通して受け取ったもの——それによる電気信号。

BMI・BCが発する、仮想世界のための電気信号。

ところが、脳はふたつの身体を同時に操作するには作られていない。

だから同時にふたつ分の身体感覚が押し寄せてきた時、単純に処理能力がパンクするか、あるいは自制作用が働くか——何はともあれ、意識レベルが低下してしまう。極度に眠気を感じていたり、酒気を帯びていたりする時のような感覚がそれに近い。

そういった状態に陥るのを回避するために設定されたのが〈フルダイブ〉である。

フルダイブとはすなわち、現実側の感覚を消失させる——五感の電気信号をシャットダウンすることで、意識を仮想世界だけに集中させる方式だ。現実の生身は当然、まったく活動することはできず、深い眠りに陥った時のような状態になる。

現在では、VRMMOで重要度の高いクエストにチャレンジする時などに、マルチレベルダイブからフルダイブに切り替えたりと、臨機応変な使い分けが為されるようになったが、そもその成り立ちはマルチレベルダイブが先なのだ。

人類には少々早すぎたマルチレベルダイブ。

そのために生まれたフルダイブ。

「ふああ……」

フルダイブ——ではなく、ただの深い眠りである。

「なんだか、懐かしい夢を見たね」

楠木諷は目覚める。

瞬間、BMI・BCが津波のような情報を寄越して来る。

いつものごとく、諷はほとんど無意識の内にマルチレベルダイブを済ませていた。現実の風景に、仮想世界のそれが重なる。複数の身体感覚がある状態は、もはや諷にとって普通とも云えた。

「長時間のフライトはやっぱり疲れる」

豪勢にも、プライベート用のジェット機。

空港に降り立って、強い日差しに目を細めた。南半球であるため、九月でも時節としては冬の終わりであるけれど、リオデジャネイロはそれでも十分に暑い。汗の浮き出す顔に、片手でばたばたと風を送りながら、諷はジェット機の側面に描かれたGWの社名をしばらく眺めた。

思えば、遠くまで来たものだ。

そんなことを、今さら考える。

「さてさて……」

血が繋がらないどころか、身体を持たないNPCの母親。トッププレイヤーとして全力疾走中の弟。平々凡々であり続ける妹。周囲からすれば、歪な家庭に見えるかも知れない。それでも、諷にとっては愛すべき家族だった。

家族、帰るべき家。

そんな場所があるから、諷は思うまま、何処までも行ける。

空港のロビーには、目当ての人物が出迎えに来てくれていた。

「こちらでは、初めまして。噂は、かねてより……」

そんな言葉とともに差し出された手を掴み、諷はぶんぶんと振るようにして告げる。

「かた苦しい！ 気楽に行こうよ」

強引な握手の仕方に、相手はちよつと面食らったらしい。諷は思わず苦笑した。「あちら側とは、ずいぶん違うね」と素直に伝えれば、「ええ。私のプレイヤーネームを知っている方と初めてお会いする時は、だいたい同じようなことを云われます」と、困ったように返された。

淑やかで、気品に満ちた仕草。

片方だけ編み込まれたブロードの長髪。

リオデジャネイロの気候に似合わない、日焼けをまつたくしていない白い肌である。清楚な白いシャツとロングスカート。深窓の令嬢という云い回しがぴったり似合う。

否、正確には、彼女は令嬢ではなく姫君である。

正真正銘の、〈姫〉。

「ティアラやドレスが似合いそうだ」

諷は冗談を云ってやった。

「どうせならば、弟を寄越した方が良かったかな？」

「……白馬の王子様ならばともかく、PK大好きな忍者くんでは、雰囲気も出ませんよ」
ため息と共に云われて、諷は肩をすくめた。

確かに、そうだろう。

彼女、アドリアナ・シルヴァ——VRMMOでは〈チート姫〉の二つ名で知られる彼女を、颯爽と迎えにやって来る者が〈虐殺鬼〉では、そこから始まる物語は、おそらく血なまぐさい何かだ。

「まあ、しかし……」

「はい、何か？」

諷は、アドリアナの顔立ちやスタイルを、まじまじと眺め回した。

「いや、ハヤテ君の好きそうなタイプだな、と……」

「……え？」

「ああ。いや、独り言」

諷はわざとらしく、誤魔化すように手を振った。

そして、怪訝な表情になるアドリアナに対して、用意していた台詞を続けた。

「それでは、お姫様……」
にやり、と。

大いなる計画の開始を、高らかに、堂々と告げる。
「誘拐させていただきますので、どうぞよろしく」

Runaway girl 家田

仮想世界にも、季節は存在する。

ただし、世界中の人間がプレイヤーとなっている現在、季節を現実の側とリンクさせることは難しい。気候区分の違いに加えて、北半球に住む者と南半球に住む者の季節感はまったく逆になるからだ。例えば、日本で暮らすプレイヤーがVRMMOにログインする時、現実では夏の盛りであるけれど、仮想世界は猛烈な吹雪に見舞われているということも十分に有り得る。

そもそも、仮想世界に現実の常識を求めるべきではない。

VRMMOはフィールド毎に、気候や天候が大きく変化する。一步でも別の場所に踏み込めば、大雨がぴたりと止んだり、鳥肌立つような寒さが汗ばむ陽気に変わったりと、現実とはまったく異なるルールが働いていた。

「うわ、暑いー！」

プレザンスが楽しそうに叫ぶ。

猛烈な速さで、空を飛んでいる。

先程まで、風が肌を刺すように冷たかった。今はもう、砂漠のように暑い。速度が速すぎるため、何処かでフィールドの境目を越えてしまったらしい。季節がぐるりと反転したように、太陽はぎらぎらと燃えている。大きな入道雲、透き通る青空。汗がぶわりと浮き始めるけれど、それもむしろ心地よかった。

漆黒のドラゴンの翼が、大気を叩きつける毎に強烈に加速する。

その都度、プレザンスは悲鳴のような歓声を上げた。

目を開けているのも、どうにかやつとだ。吹き飛ばされそうになって、思わず目の前にはためく豊かな金髪を掴めば、「おい、こら」と凄みのある声で怒られてしまう。

とはいえ、プレザンスは気にしない。

「ねえ、トリのお姉ちゃん」

日差し向きによつては、銀色にも輝くライトブロンドをツインテールに結ぶプレザンス。髪も衣服も吹き飛んでしまいそうな風の勢いだが、プレザンスはそれに負けじと声を張り上げた。

空の上、CAGED-BIRDの背中の上である。

「だから、あたしの髪を掴むんじゃない。ちゃんと肩に掴まってる」

「はーっ」

プレザンスは不満気に口を尖らせ、それでもカゴトリに従った。



しばらく経つと、夏のフィールドも真後ろに過ぎ去る。

プレザンスは再び肌寒さを感じながら、少しだけ、名残惜しむように後ろを見た。

それから、システムウィンドウをオープンさせる。天空から広々と地上を見渡す視界に、様々な文字や数字のグラフィックが重なり、華やかなパーティーのように踊り始めた。

現在日時を表示を見る。

VRMMO標準時と、その横にやや小さく、現実側、日本の標準時。

プレザンスはしばらく、その両方を見つめていた。

「どうした？ 珍しく静かだな、悪ガキ」

「悪ガキって云わないで！ リーザって、ちゃんと名前で呼んで！」

「ああ、もうちよっと行儀良くなったら、そう呼んでやるよ」

げらげらと、馬鹿にしたように笑われる。

プレザンスは頬を膨らませて不満を露わにした。

子ども扱いされることも、いつものことと云えばそうだ。

ただし、プレザンスはそんな扱われ方が好きではなかった。部屋の鏡や澄んだ湖に映った自分自身の姿を見る度に、小さな背丈や幼い顔立ちに対し、大きなため息を吐く。「ねえ、エディ。早く大人になってよ」と、相棒にしばしば声を掛けるけれど、『リーザ。わたし達は、まだまだ子供だからね』と、いつも大人が子供を宥めるように云われてしまうのだ。

カゴトリがまた、ドラゴンの翼を羽ばたかせた。
猛烈な加速。

吹き飛ばされないように、プレザンスは反射的に身体を折り曲げる。右手でカゴトリの肩の辺りを掴み、左手で真紅のプリンセスドレスの破れ目を掴んだ。大気が頬を打つ。瞳を閉ざせば、びゅうびゅうと風の音。下降。そして、ぐんと上昇。再び、飛行が安定していく。

瞳を開き、身体を起こした。

乱れたツインテールを、手で払い除ける。

プレザンスは何気なく、その自分の手を見つめた。

「ああ、もう！ 早く、大きくなりたいわ」

無性に腹が立っていた。

原因ならば、はつきりとしている。

「ハヤテ、死ね！」

空高く、一声を張り上げた。

すぐさま胸中で、『ダメだよ、パパのことをそんな風に云つたら……』と、いつもと変わらず、あくまで良い子のNPC、EDITH^{エディット}が呟いてくる。プレザンスは決して、そんな彼女が嫌いではないけれど、今はどうしようもなく、いらいらする気持ちの方が勝っていた。

「うるさい、エディ！ あいつは、わたしの敵なの！」

プレザンスは自分の胸元に視線を落としながら叫んだ。

「おい。あたしの背中の上で喧嘩すんな、チビ姉妹」

プレザンスとエディットの会話は心で行われる。

すぐ間に居るとはいえ、カゴトリには聞こえるはずもないのだけど、もはや、いつものことである。プレザンスかエディットのどちらかが大きな独り言を漏らした時は、大抵、揉めていたり、云い争っていたりする時なのだ。

カゴトリはどんな会話が為されているのか、重々承知した様子でため息を吐いた。

「まったく、お前ら、チビ姉妹は仲が良いな」

呆れたように云われて、プレザンスは反射的に云い返そうとする。

だが、不満は上手く言葉にならず、喉でつかえてしまった。だから仕方なく、頬を再び膨らまして、悔しさから顔を逸らすようにそっぽを向いた。

いつもこうなのだ。

姉妹と云われる度に、頭の中がぐしゃぐしゃになる。

わからない。姉妹ではない——と、プレザンスは思う。

エディットは、NPC。プレザンスは、そんな彼女の身体を少し借りているだけだ。そもそも、

プレザンスはNPCではない——と、自信はないけれど、自分ではそう思っている。

NPCではない。

ただし、人間でもない。

では、プレザンスは何だろうか。

実際の所、自分が何者なのかも、わからなかった。

生まれた時——自我が芽生えた瞬間は、G Wの研究用仮想空間に居て、『わたしは誰?』とまぎら考えた。次の一瞬、ビッグバンが起きたかのようなデータの奔流。世界中のあらゆる知識が押し寄せて、プレザンスを一気に包み込んだ。じわり、と。何千年分の知識——恐るべき量のデータが浸透していった。ただし、プレザンスに肉体はない。ただ意思が在るのみで、ふわふわと、感情もなく、目的もなく、無限の仮想空間に浴け込むだけの時間が長く続いた。

プレザンス——それが自分の名前であることを覚えて、自分の意思を自覚できるようになるまで、どれだけの時間が掛かったのか、はつきりとはわからない。随分な時間が必要だっただろうことは推測できる。やがて、感情を知り、性格を知り、自分というものを徐々に見出していくのだけだ——。そんな誕生の仕方は、NPCのそれとはまったく異なるものだった。

むしろ、人間の生まれ方に近いと、最近知った。

臍氣な自我。生まれているのか、生まれていないのか——それすらも曖昧な、まるで胎児のような状態。プレザンスは長らく、そんな状態にあったのだ。

NPCは、VRMMOを統治する国際仮想統一機関の至宝とも云えるD・A3仮想人格脳を根幹として生み出される。D・A3仮想人格脳は、人間のそれと遜色ない機能と性能を有しているため、

NPCの知能や知性は人間とほぼ変わらない。

ただし、人間の脳は赤子から大人になるまでの間にも成長していくが、人工物であるD・A3仮想人格脳は最初から完成されている。つまり、NPCは誕生した瞬間から、その個性が完成しているに等しい（もちろん、ブレイン・シー BRAIN-SEAという現代の最大規模ネットワークシステムの恩恵を受けて、NPCはある時から〈成長〉という機能を獲得し、それによる深い自我や個性もまた手にした）。

例えば、エディットがわかり易い。彼女は生まれ落ちた瞬間、目の前にいる〈虐殺鬼〉と〈大々魔道師〉を迷うことなく、すぐさま両親と認識した。自分が二人の子供であるという設定を——キャラクターを、最初からしっかりと自覚していたわけだ。

さながら、神様から与えられたとも云うべきそんな運命が、プレザンスにはなかった。

もしもプレザンスがNPCならば、自我の芽生えがあればほど曖昧模糊としたものになるはずはなく、誕生した瞬間からある程度の知能や知性は有していたはずなのだ。

人間でもなければ、NPCでもない。

だから、姉妹ではない。もちろん、親子でも——。

「別に、チビ助みたいになれとは云わないが……ああ、それこそ、ハヤテ君を親として慕えなんて云わないが、もうちよっと仲良くやったらどうだ?」

「嫌よ、絶対に嫌!」

「ハヤテ君も嫌われたもんだな。まあ、いつものことか」

カゴトリは再び、げらげらと笑った。

プレザンスはむっとしたまま、早口に云い返す。

「エディには良いパパなのかも知れないけれど……あんな奴、わたしは大嫌い。いつもいつも、わたしのことを邪魔者扱いして。わたしはただ、エディと遊んでいるだけなのに。わたし達はちゃんと仲良くやっているのに……。今日だって、会った途端に『代われ』なんて最悪よ！」

プレザンスは、エディットの身体アバダに宿っている——本来は存在しない自分の身体というものを、それで初めて獲得した。だが、プレザンスはちゃんと自覚している。この身体は、あくまでエディットのものであり、プレザンスはほんの少し間借りしているだけということ。

そして実際、自分は邪魔者であるということ。

エディットの愛すべき父親である〈虐殺鬼〉HAYATE。

「ああ、もう！」

もう一度、高々と吠えた。

「ハヤテ、死ぬ！」

プレザンスは、ハヤテとの最初の出会いが忘れられない。

メインクエスト『宣戦布告』が終了し、始まりの街がまるでボロ雑巾のようになっていく中（そ

の惨状の原因はメインクエストではなく、〈虐殺鬼〉の特別スキル〈過剰虐殺〉のせいであっただけで、プレザンスは初めてハヤテと顔を合わせた。

エディットとバトンタッチ。

一瞬で〈交代〉し、ハヤテにピースサインを向けた。

これからよろしく、と——。

そんな風に、無邪気に笑いかけてみた。

攻略者パーティーの他の面々には既に挨拶を済ませていたから、〈チート姫〉や〈勇者〉のように、驚かれたり、戸惑われたりするとはあるかも知れないと思っていた。

しかし、まさか、攻撃されるとはまったく思っていなかった。

特別スキル〈過剰虐殺〉による三億の分身。

天空から降り注ぐ、黒い嵐のような忍者。

メインクエスト『宣戦布告』の終了後に勃発したその大騒動で、ハヤテは最終的に敗北した。

特別スキル〈過剰虐殺〉を発動させて、始まりの街を無差別に襲い始めたハヤテに味方するものは当然いなかった。攻略者パーティーの仲間達——〈大々魔道師〉ALICEをはじめ、〈チート姫〉〈勇者〉も、彼を止めるためにそれぞれ武器を取った。むしろ、同じパーティーメンバーとして、その不始末を片付けようという気持ちが強かったのだろう。

そして、そんな彼らに加えて——。

『最高の祭りじゃな』

呵々^{かか}と笑って参戦したのは、〈化け竜〉^{テイリア}である。

始まりの街が消滅しそうな大騒動。天空が黒衣の忍者で埋め尽くされて闇夜と変わってしまったとあっては、気付かない方が無理で、見過ごすには余りに楽しんでしまう——結局、〈化け竜〉テイリア以外にも、いつの間にか、現実と仮想世界の両方にその名を轟かせるトッププレイヤー達が勢揃いするような状態となってしまうた。

それは、『エディット誘拐事件』以来のフェスティバル。

すなわち、最強のトッププレイヤー達の豪勢な共演だった。

敵味方や利害を超えて、その夜、三億の〈虐殺鬼〉を殺し尽くすため、〈大々魔道師〉〈チート姫〉〈勇者〉——そして、〈化け竜〉を皮切りに、〈歯〉〈騎士団長〉〈レトリック〉〈加速装置〉〈枯山〉〈迷路〉〈腐乱少女〉〈愛と真実〉〈豹柄鼠〉〈嘘憑き〉〈機械機械〉〈テーブルクロス〉という『異世界バトルGP』で名を馳せたトッププレイヤー達が続々と参戦した。

絢爛豪華に、時に背中を守り合ったり、時に寝首を掻いたり——。

一夜の狂騒劇。

交戦者や厄介者^{ケイラ}ではないトッププレイヤーやレベルの低いベーシックプレイヤーのほとんどは、始まりの街を埋め尽くす程の〈虐殺鬼〉の分身に吞まれて、呆れる程の回数、PKされることになったけれど、それでも心を折らず、地平線に朝日を見るまで耐えた者達は終幕を見届けた。

分身^{コペー}ではなく、本物のハヤテと——。

対峙するは、遂に完璧な共闘態勢を取った十六名のトッププレイヤー。

多勢に無勢。それでも、ハヤテは大いに笑っていた。〈騎士団長〉の率いるカイト騎士団と〈機械機械〉の生産する罌^{トランプ}の山に囲まれて、〈レトリック〉の束縛^{ロック}系スキルで捕らわれ、〈愛と真実〉の矢に足を射抜かれながら——それでも、である。

子供のように、声を上げて笑いながら、〈迷路〉と〈嘘憑き〉の虚実織り交ざった空間を看破し、〈腐乱少女〉の腕を薙ぎ払い、〈加速装置〉と〈テーブルクロス〉の必殺の一撃を回避する。

まるで、音楽のない中で踊り狂うように。

朝焼けは、さながらスポットライト。

終幕を拒むように、紙一重で攻撃を躲^{かわ}しながらアンコールを繰り返す。絶体絶命の状態となつてから、どれだけ足掻き続けたか。攻撃を続ける十六名のトッププレイヤーが全員、さすがに呆れ返るようになった頃である。ようやく「まいった。降参」と、ハヤテはこれ以上なく満足した顔で云った。丸一夜、極端に張り詰めていたのが嘘のように、それであっさりと空気が緩んだ。

皆、武器を降ろし、スキルを解除していく。肩を揉む者、大の字に倒れる者、互いに労をねぎらい合う者——反応は様々だったが、皆一様に、戦いが終わった面持ちになった。

エディットもまた、その場に居合わせた。

そして、一番にハヤテに駆け寄っていた。

その時、プレザンスは心の内側に居たけれど、噂に聞く〈虐殺鬼〉が果たしてどんな者か——興味津々で、『ねえ、エディ。代わって代わって』と、気安くねだったのだ。

驚かしてやるう、という冗談の気持ちが強かった。

エディットとプレザンス、二人の〈交代〉は素早く鮮やかに行われる。〈交代〉の証は、瞳と髪の色に反映されて、エディットならば髪色は黒、瞳は蒼となり、プレザンスならば髪色は銀、瞳はピンクとなる。

挨拶のための第一声とピースサイン。

凄惨な一夜も終わり、柔らかな朝日の中で、少し場違いなぐらいの明るさを見せたプレザンス。決して何も考えていなかった訳ではない。むしろ、初対面だからこそ、自分の印象をよりはっきりさせようと無邪気に振る舞った。

だが、瞬間——。

目の前に、刃があった。

『誰だ、お前？』

ハヤテは冷たく尋ねて来る。

『お前、なんだ……僕の娘に、何をした？』

ぞくり、と。

敵意、殺意、死の気配。

満身創痍の〈虐殺鬼〉。片腕は骨が折れているのか、異様な方向にねじ曲がっている。ハリネズミのように、無数の矢が刺さったままだ。黒装束がさらにどす黒く、乾いた血で汚れている。顔の上半分を隠す狐の白面にもヒビが入り、少し欠けていた。欠けた場所から、プレザンスと同じ色の瞳がぎらぎらと覗いている。

燃えるような殺意、冷たい敵意。

死ね、と云わんばかりの無機質な視線。

『あ、う、ああ……』

プレザンスが竦み、悲鳴を上げかけた次の瞬間だった。

『大魔法〈破裂する大気〉』

ぐしゃり、と。

ハヤテは、頭上から落ちてきた巨大な氷塊に押し潰されていた。

プレザンスの目の前、まるで潰れたトマトのような有様。嫌な音が響いたかと思ったら、ぺちゃんこになったその体躯は死亡エフェクトの光に吞まれて、すぐさま跡形もなく消え去る。

プレザンスは腰を抜かして、歯をカチカチと鳴らす。

震えは止まらなかった。

先程まで、エディットの瞳を通じて、プレザンスは〈虐殺鬼〉を見ていた。血みどろの姿は、まるで退治される寸前の悪鬼のような様相だったが、エディットに向ける表情は優しかった。

それが、激変。

プレザンスに向けられる視線は、ただの敵——ゴミでも見るようなもの。

一本の線——敵と味方を分かっ線。

それが、まざまざと見えた。

そこを跨ぐだけで、あんな風に表情や雰囲気は変わるものなのか。まるで別人に見えた。別の生き物に見えた。人間ではなく、化物。殺意と敵意だけに満ちた鬼。理性ではなく、感情が、『あれは決して相容れない相手』とプレザンスの心に刻み付けた。

プレザンスの震えは、間一髪の所を助けてくれたアリスに抱き上げられた後も、まったく止まることがなかった。『大丈夫よ、ちゃんと後で話しておくから』と、アリスは何でもないことのように——それこそ、いつものことのように云ったけれど、プレザンスの中では既に、〈虐殺鬼〉は最悪の天敵や脅威にカテゴライズされていた。

二人の間には、今も決して埋まらない溝がある。

否。溝などと表現するのは生温く、それは決して越えられない深く険しい谷である。

崖の対岸にそれぞれ立って、ハヤテはプレザンスを睨み付け、プレザンスはそっぽを向いている。そんな調子だから、毎日、喧嘩は絶えない。ハヤテに干渉される度、プレザンスはいつもイライラさせられる。

エディットはどうやら、二人の間にある谷に、どうにかして橋を渡そうと考えているらしいが、

プレザンスは無駄な努力だと思っている。

あんな嫌な奴——それに、怖い奴。

絶対に、仲良くしてやるつもりなんてなかった。

プレザンスは今一度、両手を振り上げて叫んだ。

「ハヤテの馬鹿、死んじゃえ！」

Secret 秘蔵

楠木颯はくしゃみをした。

「風邪？」

アリス・ウォルドーフが、無表情に尋ねてくる。

「いや、違う。風邪じゃない。まだ寒くないし……」

「そう。誰かに噂されているのかしら？」

アリスの冗談に対して、颯は肩を竦める。

それから、彼女の整った顔をまじまじと眺めた。

「……なに？」

「いや、別に」

颯は、アメリカ生まれのアリスが随分と日本に馴染んだことに改めて感じ入った。

BMI・BCの効果で、現代社会からは言葉の壁が取り払われている。脳内に存在する高性能なパーツは、リアルタイムの完璧な翻訳機能も有しているからだ。

しかし、耳が言葉を拾って、脳が意味を噛み砕くまで——BCの翻訳機能は刹那で仕事を果たすけれど、その刹那は、やはりラグのように些細な違和感となった。とりわけ前時代的な人間は、耳では英語を聞いているのに、頭が日本語を認識するという現象そのものに対して、とにかく生理的に受け付けないと嫌がったりもする。

来日当初はアリスもそんなBMI・BCの機能に頼っていたが、日本での暮らしが一年以上続いた今となっては、ほぼ完璧に日本語を習得していた。

「言葉だけじゃなく……」

颯はしみじみと云った。

「俗っぽいことも、よく覚えてきたし——」

誰かが噂していると、くしやみが出る——そうした俗諺ソクゲンは、国や地域に固有のものであるから、単純に言葉を覚えただけでは理解できない。『THE FIFTH WORLD』だけでなく、現実の日本という場所に対しても、アリスは理解を深めているようだ。

「——それに、積極的になっただけ」

朝の住宅街を、二人は並んで歩いている。

これまで、朝に起きて、夜に眠るという基本的なサイクルは極力乱さないように注意してきた。トッププレイヤーとなれば、どうしてもVRMMOが日々の中心となる。意識しなければ、あっという間に昼夜が逆転したり、まったく時計を気にしない生活になってしまったりするのだ。

実際、『THE FIFTH WORLD』のβテスト初年度、目覚めてからすぐに身支度を整え、外出するなどという事は滅多になかった。それよりも、ベッドで微睡まどろみ続けながら、とりあえず仮想世界にマルチレベルダイブし、片手間のように経験値を稼いだりするのが普通だった（ベータシックプレイヤー等に云わせれば、起き抜けの頭でログインする方が大変らしいけれど）。

「積極的？ 何が？」

颯の独り言のような呟きに、アリスは小首を傾げた。

「ほら、こちら側リァッラルのことに対して……」

わかり易いように、颯は具体的に付け足す。

「お前の方から、学校に行こう、とか——」

颯は、生活スタイルが大きく変わる契機となったのは『エディット誘拐事件』だったと思い出していた。βテスト初年度のクライマックスを飾るものとして、事件は華々しく、絢爛豪華に多くのプレイヤーを巻き込んだ。そのため、『THE FIFTH WORLD』と数多あまたのトッププレイヤー達に大なり小なりの影響が出たものだ。

騒動の中心に居た颯とアリスは、ある意味、最も大きな影響を受けたと云える。

事件の決着と共に、二人は、エディットを〈本当の子供〉として受け入れられるようになったのだから――。

心境の変化。

アリスは確かに、あれから少し変わった。

事件の後、現実と仮想世界の両方が落ち着き始める頃になって、ちょうど、颯とアリスの学年が一つ上がった。高校の二年生から、三年生へ。そして、まるでルールが切り替わるように、色々な物事に変化の波は訪れた。

βテストの開幕以来、多くのトッププレイヤーが『THE FIFTH WORLD』に全てを傾けたように、颯とアリスもどつぷりと仮想世界に浸かり込んでいた。颯は、それが悪いこととも思っていないし、間違っていたとも思わない。ただし、リアルで学校に通ったり、週末に友達と遊びに出掛けたり、そうした普通の生活からは完全に離れてしまった。

時折、気まぐれで学校に登校することもあったけれど、所詮は暇つぶしのようなものだ。一年間のほとんど、何もかも『THE FIFTH WORLD』と共にあった。学校はもちろん、どこか遠くに出掛けることもなく、友達や知人との付き合いも疎かぶつになっていた。

そんなある時――。

「学校生活も、ちゃんと経験したい」

アリスはぼつり、と独り言のように漏らした。

「これまで、そうした当たり前の現実世界を、私はまったく知らないまま――知ろうともしないまま、仮想世界だけを全てとして生きてきた。それではいけないのかも知れないと、そう思ったから……」

朝の住宅街、静かな通学路。

秋の訪れまで、もう少し。制服の衣替えを数日後に控えて、二人はまだ夏服である。残暑は厳しく、颯は適当にカッターシャツの腕を捲り上げていた。登校中は怒られる心配もないだろうと、ネクタイもだらしなく緩めている。対照的に、アリスはきっちりしていた。皺一つないブラウスにスカート。ただし、それらを洗濯し、アイロンをかけてやったのは颯である。

相変わらず、家事は壊滅的なアリス。

さすがに洗濯機ぐらい使えるだろうとやらせてみたら、なぜか、ぐるぐると大根が洗われている奇々怪々な状況に遭遇した。「え、これは……なにか、あの、黒魔術の儀式的な？」と尋ねたら、アリスはぐつと親指を立てて、自信満々、「見て。洗濯機が動いた」と答えたものだ。

アイロンなんて任せたら、何が起きるか想像しただけで怖い。

笑えない過去のエピソードを思い出しながら、颯は話を続ける。

「学校にもだいたい慣れて来たよな。ちゃんと通うようになって、もう半年近く……」

颯はVRMMO『クロス』の時代、トッププレイヤーとなつてからもそれなりに学校へ顔を出していたため、良くも悪くも、「おや、珍しい奴が来た」ぐらいの扱いで済んだ。

問題は、アリス。
世界一のアイドル。

彼女がただの高校生の真似事をして学校に通うなど、特大の爆弾を投げ込むようなものだ。実際、最初はトラブルが連続した。颯はもう、その頃のあれこれを思い出したくもない。

ねたみ、ひがみ、負のオーラ——アリスがとにかくチャホヤされる一方、颯はそれと対照的な扱いを（主に、男子から）受けることになった。

現実リアルはやはり、良いものではない。
そんな風に、颯はしみじみ思つたものだ。

VRMMOならば、大体が忍刀しのびなと小太刀こだちを振るうだけで終わるが、現実はそうではない。馴れ馴れしく肩を小突いてくる者に対して、その首を一瞬ではね飛ばしてやることなどできず、颯はただの年相応の少年として、へらへら笑つてやり過すすしかなかつた。

「まあ、しかし……」
颯はため息と共に云う。

「そろそろ衣替えて冬服だから楽しみだ」
「楽しみ？」

「ほら、似合いそうだから」

颯は、不思議そうに云つたアリスに対して、その全身をゆっくり指差した。

「また、クラスの奴らは騒さわぎそうだけだな」

「そうね。でも、私も楽しみ」

「なにが？」

「颯が、私を褒めてくれるかも知れないこと」

アリスの表情は変わらない。

「似合っていたら、ちゃんと褒めてね？」

無表情のまま、静かに親指を立てた。

「見た目を褒められるなんて、慣れっこだろ？」

颯は敢えて、呆れたように云つてやる。

「ええ。でも、ハヤテに云われると嬉しい」

アリスは堂々と恥はずかしい台詞を口にする。

颯は思わず言葉を失つたが、アリスもまた黙もり込んだ。

周囲の者から不思議に思われることが多いけれど、颯は何となく、アリスの感情が読み取れる。顔色は一切変わらなくとも、彼女が照れていることは明らかで、「お前、意外と自爆が多いよな」と感想を口にしてやる。

そのまま、静寂。

見合うこと、しばらく――。

「おい！ 朝っぱらからイチャつくな、このバカップル！」

ブレーキの音を盛大に軋らせながら、それ以上に大きな叫び声。

沈黙ときこえない空気の中に、勢いよく自転車突っ込んで来た。

「吹っ飛べ、楠木！」

通学用の一般的なシティサイクルではなく、高価なロードバイクだった。

間が悪く、下り坂。

急ブレーキだけで、猛烈な勢いを全て殺すことはできない。怒鳴り声の調子からして、そもそも、停まろうという気持ちがあったのか疑わしいけれど――。

颯は轢かれた。

「ぎゃあー！」

悲鳴を上げる程度には、ダメージが大きい。

大きなタイヤに背中から突き飛ばされて、颯は舗装路に膝から崩れ落ちる。

背中と膝の痛みをズキズキと感じながら、しばらく驚きが冷めるまで待たなければいけなかった。ようやく身体も心も落ち着いて、ふらふらと立ち上がる。

そして、「おい、こら。有島！」と、怒鳴りながら振り向いた。

「なに、この有島さまに文句あんの？ 楠木の癖に……」

ロードバイクに跨ったまま、背中に通学鞆。

着崩した制服のスカートは短く、健康的に日焼けした足はすらりと長い。

一方で、その髪もまた男子のように短く、昔からの男勝りな性格をそのまま体現している。

有島芽衣子、高校三年生。颯とアリスのクラスメイト。颯にとっては、小学生の頃から学校もクラスもずっと一緒に相手だ。喧嘩したり喧嘩したり、云い負かされたり殴られたり轢かれたりしながら、今の今まで、非常に仲良くやって来た。

端的に云うならば、天敵

「やっほー、アリスちゃん。グッモーニン」

朗らかな笑顔で、芽衣子はアリスに手を振る。

アリスはと云えば、小さく頷き、手を振る代わりに親指を向けていた。

そんな仕草に対して、芽衣子はうっとり自分の頬に手を添えてため息を吐く。

「はあ、可愛い。アリスちゃんはいつでも可愛いな」

ロードバイクに跨ったまま、器用にアリスを引き寄せてハグする芽衣子。まだダメージの残る颯は、それでも間に割り込んだ。芽衣子を突き飛ばすようにして、二人を強引に引き剥がす。

「何するのさ」

「こっちの台詞だ」

アリスを庇^{かば}うようなポーズで、颯は吠える。

「朝っぱらから、俺を自転車で轢^こくな」

「あ？ 夕方に轢^こけてこと？」

「轢^こくな。終日、轢^こくな！」

芽衣子は面倒臭^{めんどくさ}そうに、ひらひらと手を振った。

それから、短い髪をわざとらしく掻き上げると、猫のような瞳を大きく見開いて颯を見下ろす。

どこの部活にも所属していないけれど昔から運動が得意で、女子としては背が高い。男子として平均的な颯と、ちょうど同じぐらいだった。

今は、自転車に乗っている分だけ目線が高かった。

威圧的。芽衣子も、意識的にやっているらしい。

颯が舌打ちすれば、「ふーん、感じ悪い」とすぐさま言い返して来る。

「アリスちゃん、今日もまた、昼はお弁当をいっしょに食べようね」

颯から露骨に視線を逸らすと、芽衣子はアリスの方に声をかける。

「嫌だね」

颯が答えた。

「いや、楠木には云ってないってば」

「馬鹿か？ アリスの心を代弁してやっただけだ」

きやんきやんと、互いに吠^なえ猛^まる。

そんな中、アリスがぼつりと云った。

「昼……私は、別に大丈夫」

「ほら、楠木。聞こえたかしら？」

勝ち誇る芽衣子。

「アリスちゃんは、あんたよりもあたしの方が良いってさ」

「馬鹿な。単に、お前に対する同情だよ。アリスは優しいから……」

「はいはい、うげえ。あたしも同情してやるわ。あんたも昼はいっしょで良いわよー」

「なんだよ、その憐^{あわれ}みの視線は？ 上から目線は？」

「はあ？ アリスちゃんとイチヤつきまくって、男子からはぶにされているあんたがよく云えたもんね。憐^{あわれ}れんであげるわー、見下してあげるわー。一人ぼっちは寂しいでしょう？ 頭を下げるなら、いっしょにお昼を食べてあげてもいいわよー？」

「畜生！」

颯は吐き捨てるように云った。

「是非、お願いします！」

「……昔から、追い詰められると素直ね。あんた」

教室の片隅、机を寄せ合って三人で昼食を食べる。

二十人程のクラスメイトの喧噪も、話し相手が目の前にいると気にならない。アリスはわずかに視線を教室中に巡らしてみた。幾人か、視線が交わった者がいる。それだけ注目されているということだが、いつものことであるから、アリスはやはり気にしなかった。

教壇と生徒の机が並ぶ光景は、前世紀の頃から驚く程に変わらない。BMI・BCのグラフィック機能が黒板を不要にしたことは仕方なかったとしても、明らかに変えた方がいい物以外は極力、昔のままにしておこうという方針があるからだ。

BCチップの登場で、世界はがらりと姿を変えてしまった。だから、人々はきつと、変わらないものを強く求めたのだろう。それは何となく、アリスにもわかる気がした。

「おい、こら。有島！」

颯が叫んでいた。

「俺の弁当を勝手に食うな！」

「あなたの料理がちゃんとしているか、あたしが確かめてやるわ」
相変わらず、とても騒がしい二人だ。

アリスはとりあえず、自分の分まで奪われないように弁当箱を手元に引き寄せた。

その上で改めて、ドタバタしている颯と芽衣子を眺める。仲が良い。そんな風に云えば、二人は

きつと勢いよく否定するだろうけれど、他人の目からすれば明らか。とても気の置けない仲である。

幼なじみ。

アリスにはないものだ。

否。親も兄弟も、アリスには何も無い。

何一つ、最初から持つことを許されなかった。

クリア・ジーン・プロジェクト——BCチップの登場とVRMMOの発展による極端な少子化時代の到来に対して、アメリカ合衆国が強行した打開策。現在では安定的に子供が生産されるようになっていくが、まだまだ反発も強ければ、問題も山積みのみまだ。

クリア・ジーン・プロジェクトの最初の子供。ファーストキッズ

アリス・ウォルドーフの出自はそんなものであり、基本的に、極秘の事柄でもある。

ふと思いつく。アリスは何気なく——何気ない風を装って、颯にその秘密を告白したものだ。仮想世界で初めて出会ったのは『異世界バトルGP』の準決勝で、それからVRMMO『クロス』で一年近く、しばしば顔を合わせるようになった。そして『THE FIFTH WORLD』のβテストを通じて初めて現実で向かい合った。しかし、その時はまだ、現実で知り合ってから大した時間も経っていなかった。

それなのに、アリスは自分自身の最も深い場所にあるものを打ち明けた。

打ち明けてしまいたい、そう思ったからだ。

いつから、彼を好きになったのだろうか。
今ではもう、わからない。

わからないけれど、出会った瞬間——あの準決勝の舞台において、『大々魔道師』、捕まえた』と刃に貫かれた瞬間から、確かに、静かな予感があったのかも知れない。

アリスは小首を傾げながら、無表情のまま、騒ぎ続ける颯と芽衣子を眺めていた。

有島芽衣子。彼女と初めて出会ったのは、来日した直後、おそらく、この教室に足を踏み入れた時である。ただし、その時はまだ、彼女はクラスに大勢いる誰かに過ぎなかった。アリスは長らく、彼女の顔も名前もまったく認識していなかった。

挨拶を交わし、雑談をするようになり、そうして颯の幼なじみであることを知ったのは、わずか半年前——高校にちゃんと通うようになってからだ。

現実における、初めての友達。そう呼べるようになったのは、やはり、ごく最近のことである。

改めて思い返せば、アリスには友達と呼べる者が少ない（もしかすると、一人もいなかったかも知れない）。カゴトリやエーフォーは友人と云うよりも、仲間と呼ぶ方が正しい。アメリカで暮らしていた頃は屋敷に沢山のNPCが仕えていて、親しくはしていたけれど、友達と呼べるような関係性ではなかった。

そもそも、アリスには同年代の知り合いが少ない。

物心ついてからすぐに、VRMMO『ゲルタニア』でトッププレイヤーの仲間入りを果たしたため、

周囲にはほとんど年上の者しかいなかった。人生で最も多くの時間を共有した〈大陸〉Ontologyは、友達ではなく、親のようなものである。

同年代の、普通の友達。

「ねえ、アリスちゃん。ちよつと遊んで帰ろうよ」

放課後、芽衣子からそう云われて、アリスはわずかにリリースした。

まだまだ、同年代で同性の者と現実で付き合うことに慣れない部分は多い。

無表情だから、誰にも気付かれないだろうけれど。

「ああ。行って来いよ」

颯は芽衣子と表面上、犬猿の仲。だが、アリスに仲の良い友達ができること自体は歓迎しているらしく、このような状況は積極的に後押しして来る。「晩御飯までに帰って来いよ」と、こっそり、保護者のようなことまで耳打ちされた。

「……わかった」

結局、アリスは静かに頷く。

日が落ちるまで、まだまだ時間はある。

VRMMO第一世代——ほんの少し前の時代に生きていた者達は、夕焼けに染まる中を下校するのが普通だったと云うけれど、今は、BCのお陰で勉強に費やさなければいけない時間が減って、